

琉球大学学術リポジトリ

ソーシャルメディアを用いた対人交流

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2018-10-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 淡野, 将太, Tanno, Syota メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/42685

ソーシャルメディアを用いた対人交流

淡野 将太

Interpersonal Networking through Social Media

Syota TANNO

目的

本稿は、ソーシャルメディアを用いることでどのような交流が可能となるか記述する。筆者は、琉球大学において共通教育科目 (i.e. 教養科目) として心理学を概説する「心の科学」、心理学の概説において対人関係に焦点を当てた「人間関係論」、また、教職科目として幼児、児童及び生徒の心身の発達及び学習の過程を講義する「教育心理学」を担当している。ソーシャルメディアを用いることでどのような交流が可能となるか記述することは、これらの科目を教授する際に有用であると考えられる。

方法

ソーシャルメディアのひとつである Facebook における交流を記述する。アカウント取得から1か月間の交流を記し、最後に総括として得られた知見をまとめる。Facebook を用いて交流を行った時期は2017年7月から8月である。なお、Facebook での交流を行うためや、Facebook をきっかけとして交流するためにソーシャルメディアのLINEを活用したケースがある。

Facebook における交流

第1週

1日目、Facebook のアカウントを作成し、プロフィール写真を登録し、アルバムに写真をアップロードし、「友達」の検索を始めた。筆者の高等学校の同級生 T に LINE を用いて Facebook を利用しているか尋ねると、「友達」の投稿などを見るばかりだがアカウントを持っているとの回

答を得た。同級生 T の名前は日本で類比的に多い名字と多い名であることに加えてプロフィール写真に明瞭な顔写真を使っているわけでもなかったため検索して本人と同定するには時間を要した。事後的に判明することだが、「友達」の登録数が増加すると出身地が同じであることや通った学校が同じであることを元にして検索した同姓同名の中で「友達」が予測として検索上位に上がってくる。しかし、始めたばかりはそれが無い。同級生 T から、同じく高等学校の同級生 Y は仕事で Facebook を活用して使い方に類比的に詳しいと聞いていた。検索すると見つけ繋がることのできた。筆者が修了した大学院の後輩はプロフィールとして開示している情報が明確で比較的容易に見つかった。「友達」は10人になった。これ以降、1日10人のペースで「友達」が増加した。

2日目、過去に通った幼稚園から中学校までの同級生および1日目で繋がった高等学校の同級生を中心として繋がりが広がった。「友達を検索」機能では、中学校以前の所属での検索機能が無い。地元の幼馴染や同級生の検索方法が分からなかった。出身地で絞って検索が可能であるが、地元の幼馴染や同級生が生まれも育ちも筆者と同じとは限らない。同級生 Y に聞けば、小学校時代の同級生を検索して芋づる式に繋がる方法があると言われた。親しかった人の名前を検索し、本人と思しき人を見つけてリクエストを出した。結婚を機に名字が変わっている人は少なくなかった。結婚を機に名字が変わった人には旧姓を併記している人もいた。「友達」は20人

になった。筆者を見つけた人から「友達」としてリクエストされることもあった。

3日目、メッセージ機能を使って交流を展開した。メッセージを送信し、返信があった「友達」とは最近の動向を伝え合ったり「元気だよ。」程度でコミュニケーションが終わったりした。写真の撮り方やアップロードの頻度から、その人の行動傾向は幾分か推論できる。「友達」は30人になった。小学校、中学校、高等学校、大学、大学院の同級生や先輩や後輩と繋がり、繋がりが広がった。

4日目以降、メッセージ交換を繰り返し、「友達」のリクエストを続けた。中学校および高等学校が同じ後輩が次のようなキャリアを形成していた。名前と写真に見覚えがあったため「友達」リクエストをすると、当日中に繋がりメッセージをやりとりするようになった。学部卒業後に United Kingdom の大学院で MA (Master of Arts, 修士号) を取得し、JOCV (Japan Overseas Cooperation Volunteers) をし、メッセージのやり取りをした当時は ODA (Official Development Assistance) で Republic of Mozambique にいて、数日後に帰国すると言っていた。博士号にも興味を示し、自身の関心とマッチする大学院を探していると言っていた。国際協力分野の大学院が筆者の出身校だったのでいくらか質問も受けた。結婚後 Republic of Singapore に住んでいる高等学校の同級生や、Republic of Singapore の人と結婚して現地で交流のある同じく高等学校の同級生や、自身が帝王切開で出産したエピソードを小学校の道徳の授業で活用している小学校教員で学部の同級生などがいた。「友達」リクエストを続けて、繋がらないこともあった。同級生 Y に聞けば、繋がりにくい場合は無視されるだろうし、Facebook にログインしなくなって久しい人はリクエストさえ目にしないということだった。リクエストに対しておよそ 10% は音沙汰がなかった。また、「友達」として繋がった人の中にはメッセージ機能を使用していない人もいるようで同じく返信がなかった。

第2週

Facebook を始めて2週間が過ぎると「友達」は110人を超え、過去に親しくしていた人とは

メッセージの送受信で連絡したり LINE アカウントを教え合ったりやりとりをしたりした。当初は1日10人のペースで増加していた「友達」の増加ペースは遅くなってきた。

写真をアップロードして、ソーシャルメディアを用いた欲求の充足を実感した。Facebook を始めてから「たんちゃん! 元気?」とか「淡野は結婚したの?」とか「学部卒業後どうしてたの?」といったメッセージを何件か受信した。筆者は学部を卒業して大学院に進んでから交流が極端に狭くなった関係で、何をしていたのか分からないままだった人が少なくないようだった。そこで、学部卒業後の研究や結婚や琉球大学着任後の事項について文章と写真をアップロードした。Maslow の欲求階層 (hierarchy of needs) に関する研究 (e.g. Maslow, 1943, 1954) では、欲求について、低層から順に、生理 (physiological), 安全 (safety), 愛情/所属 (love/belonging), 自尊 (esteem), 自己実現 (self-actualization) という階層を想定する。写真をアップロードし、「いいね!」がつき、コメントをもらい、メッセージで反響が寄せられた。人と繋がっているという所属の欲求、また、自分の行動に対して支持を受けて承認されるという自尊の欲求が、それぞれ満たされることを実感した。

同級生の動向を参照できた。高等学校の同級生は日本銀行に務めていて、社会調査や統計の研究を展開して大学教員となるキャリアがあると教えてくれた。同じく、高等学校の同級生は実家の靴下工場を継いでいた。筆者が通った奈良県立畝傍高等学校は奈良県全域から生徒が集まる。奈良は靴下の産地であり、同級生は靴下工場の息子だった。学部の同級生は、行動力を発揮して国内外を旅行して回っていた。外国にとりあえず行ってたどり着いた土地でホテルを探しながら旅回ったり、日本アルプスの山山に登ったりしていた。華奢で国内外を動的に動き回るには一見不利な体格の同級生である。海外では女性のひとり歩きや女性グループの旅行は犯罪の対象になりやすい。華奢な彼女があちらこちらを旅していた。彼女は小学校教員をしていて夏には長期休暇を取りやすいようである。大学院の同級生は関東の私立大学で准教授をし

ていた。今後のキャリア展望を問うと、大学を移るのも面白そうだが今の研究教育環境が良く、同僚教員も学生も良く、現状は悪くないと応えた。このようなやり取りをできたのは Facebook で繋がったからである。

筆者が「友達」として繋がることで筆者を介して「友達」同士が繋がったことがあり、他者の交流に貢献できた。1か月間のテンポラリな取り組みが類比的にステディな交流を行なっている「友達」に貢献できたのは良かった。「友達」のひとりにはメッセージで謝意を伝えてくれた。

小学校から大学院までのアルバムを見たことをきっかけにして Facebook で同級生と繋がった。「知り合いかも」欄に表示される名前と同級生の名前を同定できるようになり「友達」としてリクエストするに至った。地元の同級生の名前と確認して「友達」リクエストし、繋がった女性がいた。彼女とは幼稚園と小学校と中学校で交流があった。名前をよく見たら漢字が少し違っていた。旧姓と結婚後の姓が同じような漢字だった。その姓にも見覚えがあった。写真を見て確信した、結婚相手も同級生だった。メッセージで驚いた件を伝えると「不思議な縁があって。正直自分が1番驚いたよ。」と返事が届いた。

学部で同じコースだった同級生、先輩、後輩とは教職に関する話題で交流した。同級生のひとは卒業後から教員を続け、夏は免許法認定講習や免許状更新講習を受講している。LINE の連絡先を交換し、卒業してからのことを共有した。児童やその保護者などに参照されるのは面白くないのでソーシャルメディアはほとんど使わないということだった。この点は人によって判断が異なり、教員であってもプライバシー設定をかけて積極的に自身の情報を知人と共有する人がいれば、同級生のようにほとんど共有しない人もいるし、そもそもアカウントを持たない人もいる。Facebook の紹介機能を使って筆者がすでに繋がっている同級生や先輩を彼に紹介した。先輩のひとは JICA (Japan International Cooperation Agency) を通じて Republic of the Philippines で日本語教師として3年間勤務していた。先輩はまた海外で勤めたいと言っていた。JICA を通じての海外派遣はキャリアで1度に限

定されていて、私立学校の海外校勤務を視野に入れているらしい。後輩のひとは、2児の母で、当時は育児休暇で教職から一時的に離れていた。第一子を出産し育児休暇が明けた頃は、自身の教材開発も軌道に乗る前で、子どもを寝かしつけ、自身も仮眠し、早朝というか深夜に起床して教材開発をし、子どもを預け、出勤して授業をしていたと言っていた。後輩は「振り返ってあの頃はよくやっていたと自分でも思う。」と提示した。

筆者の助教時代に関わった学部生のひとは、学部を卒業してから企業に勤務しているが、大学院に進まなかったことを後悔していると言った。民間企業の地方勤務では物足りないのかもしれない。

同じく、助教時代に関わった大学院生のふたりがマスター修了後に結婚していた。Facebook をはじめて1週目ですぐにメッセージ交換をしていたが、写真を見ていて同級生と結婚していたことを発見した。「写真を見て気付いたよ。おめでとう。」と伝えると「今度琉球大学にふたりで挨拶に行きます。」と言っていた。

Facebook をはじめて2週間が過ぎ、従来の自分の感覚が想起された。小学校から大学院までの同級生や先輩や後輩とやりとりして「そういえば自分はこうやって生きていたんだな。」と認識した。

第3週

Facebook を始めて3週間が過ぎ、「友達」は120人を超えたところでほとんど増加しなくなった。筆者の「友達」の中には1,000人以上の「友達」がいる「友達」がいるが、筆者は業務で Facebook を活用しているわけでもなく、そもそも交流は狭く、「友達」の数を増やすことが本文でもないので交流はこれくらいの人数が妥当だと考えた。同級生 Y に聞いたところではソーシャルメディアでは Instagram が隆盛とのことで、アカウントを持っていてもログインせず見ていない人が少なくないらしい。LINE は利便性の高い連絡手段として普及したアプリであるが、近況をシェアする機能も備わっているので Facebook を使い続ける必要性を感じなくなる人もいるだろう。今回、Facebook を利用してその辺りの事

情を体感することができた。「友達」のリクエストは継続的に出していたが、音沙汰がない人がいくらかいた。中には筆者と繋がりたいくない人もいよう。高等学校に通っていた頃によく遊んだアルバイト先の先輩や同輩や後輩とは是非繋がりたいが、ニックネームは覚えているがフルネームが分からなかったり名字は覚えていて出身地と合わせて検索できたがヒットしなかったりという事情でアカウントが見つからなかった。アカデミック系の人は学会で会えるし、その気になればwebで検索して研究室のメールアドレスに連絡することができるが、大学院に進学しなかったり進学しても企業就職したりした後輩は何をしているのか分からない。何件か知らない人からリクエストが来たが全て断った。間違えてリクエストボタンを押すこともあるだろう。

「友達」の数年前のことから近況までを参照できた。「友達」として繋がると、その人のタイムラインを遡っていつ何をしていたのかが分かる。心理学における自己開示 (self disclosure) と自己提示 (self presentation) が混在する形であるが (cf. 北村・大坪, 2012), 自分をどのように見せるかに趣向を凝らしていると言える。写真を見ると、学校のことや旅行のことや仕事のことや出産のことが分かる。その人が自身の「友達」の投稿や企業のプロモーションなどに「いいね!」を提供すると、その件が筆者のホーム画面上に表示され一覧できる。自身の情報をほとんどアップロードしない人もいるが、「いいね!」の提供方法でその人の指向性や仕事のことを幾分か知ることができる。例えば、「友達」の育児や家族に関する投稿に継続的に「いいね!」を提供している人は、育児のネットワークに積極的だと考えることができる。飲食店で働く学部と同級生は近隣の飲食店の投稿に頻繁に「いいね!」を提供している。同級生は店長をしていて、飲食業界はネットワークが重要で筋を通す必要があるため頻繁にチェックしているのだろう。ホーム画面上では筆者の「友達」が新たに誰かと「友達」になった件や、筆者の「友達」が「いいね!」を提供した結果、筆者の知らない人の投稿まで通知されて「友達」の動向を参照する

こともできた。

筆者は沖縄県北谷町のカフェで行った研究室の打ち上げの件を写真とともに投稿した。「友達」から「いいね!」をいくつかもらった。これまでの筆者の投稿は、今回 Facebook をやる件と、これまでの研究や結婚の写真のアップロードだった。近況を載せることにして打ち上げをした件を載せた。「いいね!」をくれる人は大体決まっていた。

第4週

Facebook をはじめて4週間が過ぎ、「友達」の数は130人を超え、メッセージ機能を用いた交流と投稿に「いいね!」をもらう交流が続いた。筆者からの「友達」リクエストは、思いついて提出したり「知り合いかも」欄に掲示されてリクエストしたりしたもの以外は Facebook をはじめて2週くらいまでに出したものが多く、この時期になって繋がる人は基本的には久しぶりにログインしてリクエストを目にした人である。Facebook を続けて分かったことは、「友達」リクエストを出して返事がないが共通の知人の投稿に「いいね!」を提供していることでログインしておりリクエストをネグレクトしていることが分かるということである。また「友達」の数が1人減ったことが2度ある。130人という類比的少数から減ったので誰が減ったのか分かった。心的外傷が幾分あるが、このような事態も含めて人間関係がどのようになるかを見聞することが今回の目的である。

講師時代に島根大学で2年間指導した教え子と繋がりに、元気にしているとメッセージが返って来た。卒業して銀行員を続けて日々忙しくしていると提示していた。教え子は同僚と沖縄を旅行する予定で筆者はお勧めを問われた。

免許状更新講習の講師として宮古島と石垣島を旅行したので、その際の写真を投稿した。コメントや「いいね」をもらった。

総括

Facebook を利用した交流を1か月で終えた。最後の投稿をし、4週間でコネク特できた知人や友人とリアクションやメッセージで交流し、リクエストしたままになっていた「友達」申請を

取り下げ、最後にアカウントを削除した。

最終的な「友達」の人数は133人だった。繋がったのは幼稚園から大学院までの先輩、同輩、後輩と、広島大学助教、島根大学講師、琉球大学准教授としての教え子だった。ビジネスで活用している人は1,000人や2,000人の「友達」がいるようで、その人たちの投稿を参照すると、業務内容を投稿し、関係者からリアクションを受けていた。

人がソーシャルメディアで相対的剥奪感 (relative deprivation) を覚える具体例を参照できた。例えば、筆者の同世代は結婚出産育児をする年齢にある。結婚した、子どもが生まれた、子どもが保育所や幼稚園に入所入園した、という情報はトピックであり写真や投稿がアップロードされていた。これらの情報に触れた時、結婚したくてもできない人、子どもが欲しくてもできない人、子どもができたが何かしらの困難がある人などは、相対的剥奪感を覚える可能性がある。自身の充実を自己呈示するように、旅行の話や仕事のトピックを投稿する人もいる。

「いいね！」をはじめとするリアクションは、返報性 (reciprocity) のツールである (cf. 深田, 1998)。自身の投稿に「いいね！」をもらってその人の投稿に「いいね！」を返す。関係性志向の「友達」同士やビジネスで繋がっている「友達」同士はリアクションを提供し合うだろう。筆者はアカウントを開設してから削除するまでの間に「いいね！」をひとつも提供しなかった。理由はふたつあり、ひとつは「いいね！」や「悲しいね」などと思わなかったこと、もうひとつは「いいね！」などと思ってもわざわざそれを通知しなくても良いと思ったことである。大学院の後輩と繋がった時に「淡野さんが投稿した時は「いいね！」しますね。」と言われ、実際に「いいね！」をもらったが、予告「いいね！」はまさに社交である。

普段から交流があるが Facebook で繋がったことをきっかけに交流が展開することもあった。大学院の後輩と繋がった際は「淡野さん、相談があるので電話していいですか？」と言われ、電話で2度話をした。1回目は大学教育の話だった。2回目は研究の話だった。

Facebook で繋がった133人の中で5人と連絡先を交換した。そのうちの3人とは後日予定を合わせて奈良と東京で再会した。2人とは今後会う予定を立てている。沖縄に来る際には連絡をもらう予定である。

引用文献

- 北村 英哉・大坪 庸介 (2012). 進化と感情から解き明かす社会心理学 有斐閣アルマ
- 深田 博己 (1998). インターパーソナルコミュニケーション 北大路書房
- Maslow, A. H. (1943). A Theory of Human Motivation. *Psychological Review*, 50, 370-96.
- Maslow, A. H. (1954). *Motivation and personality*. New York: Harper and Row.